大切な「命」や「情報」

「第3回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内104校から1033点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は8日、福島市の福島民友新聞社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。（原文のまま）

コンクールは、小・中学校で新学習指導要領に「新聞活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で実施した。

「新聞記事を読んでの感想」をテーマに、今年5月から8月末までに福島民友新聞をはじめ一般紙に掲載された記事や社説、コラム、連載企画などを読んで感動したこと、ためになったこと、興味を持ったこと―などの感想文を募集した。今回も、東日本大震災や原発事故関連の記事に加え、いじめ問題の記事を読んで、自ら体験したこと、感じたことを踏まえての作品が多かった。

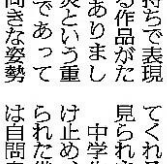
審査長を務めた福島地区中学校教育研究会国語部長の佐久間郁文山木屋中校長が審査員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査長＝佐久間郁文（山木屋中校長）▽副審査長＝内藤良行（福島大付属小副校長）▽審査員＝佐藤了弐（福島三中教諭）大槻幹一（清水中教諭）菅野順子（北信中教諭）小野寺千恵（北沢又小教諭）伊藤絵美（福島三小教諭）川崎修司（福島大付属小教諭）高沢里美（瀬上小教諭）渋谷朋子（福島二小教諭）花輪忠康（平野小教諭）

審査長講評

福島地区中学校教育研究会
国語部長
佐久間　郁文（山木屋中校長）



「新しい発見や気づきが素直に表現できている作品が多く、楽しく読むことができました」

ある審査員が語ってくれた言葉です。おそらく皆、同じ思いだったに違いありません。今年で3回目を迎えた「みんゆう新聞感想文コンクール」に寄せられた多くの作品を読んで、子どもたちの物事を見つめる純粋さに心打たれたからこその言葉であると感じ入りました。

昨年はやはり原発問題への関心が高かったようですが、今年は幅広い話題が取り上げられていました。

小学3・4年生の部門では、難しい記事であっても、丁寧にそして粘り強く、時には家族の手を借りながら最後まで読み切り、自分の生活と照らし合わせながら子どもらしい素直な気持ちで表現している作品がたくさんありました。震災という重い課題であっても、前向きな姿勢で書かれていて希望が持てました。

また、小学5・5年生の部門では、心身ともに大きく成長する過程にあって、視野の広がりを感じさせる作品が多数見られました。身の回りから世界まで視野を広げ、再び自分に立ち戻ってより深く思考をめぐらす姿が見られ、さすが高学年だ、と頼もしく感じました。また、入賞作品の中には家族の偉大さが描かれ、福島の復興を願う気持ちが存分に込められるなど、県民に夢と希望を与えてくれるメッセージ性のある作品が見られました。

中学生部門では、記事を正しく受け止め、自分の思いがしっかり込められた借り物ではない言葉で、時には自問自答し、時には悩みながら自分の考えを確かなものにしていく姿に、人間的な成長を見ることができました。このように、入賞作品全てに言葉の持つ力と豊かな感性をはっきりと感じ取ることができました。

全部門で、応募規定に関すること、原稿用紙の使い方や書き言葉を意識すること、記事とのつながりを大切にしながら、自分の思いを的確に表現する力を高めていく必要があるという課題が挙げられました。

毎日触れる身近な情報源である新聞記事を媒体として、資料活用能力を高めると同時に子どもたちの視野を広げ、思考力、表現力を身に付け、そして、豊かな感性を磨くためにも、新聞を活用して表現する機会を持つことは生きる力を育むうえでも重要です。その意味で、一つの方向性を示してくれているこの新聞感想文コンクールの存在と果たす役割は大きいものがあります。本コンクールの今後ますますの発展を祈っています。

新聞を通して人を育てる

第3回 みんゆう新聞感想文コンクール 最優秀・優秀作品

◆最優秀賞（中学生の部）

「『命』とは」

須賀川二中3年　永山　智基君

平成二十四年六月十五日、日本で初めて、6歳未満の脳死が判定された。翌日、心臓や肝臓などの臓器移植が行われた。

新聞記事には、解説もついていて、幼い子どもの脳死判定や、家族の在り方、終末期医療の在り方について問題の提起がしてあった。また、脳死判定された子どもの両親のコメントも載っていた。

ぼくは、この記事を読んで、一人の命が何人も救うことができるなんて、とてもすごいことだと、その時は思った。自分の死の後も命はつなげることができるのだ。

しかし、母の言葉がぼくの気持ちを変えた。

「お母さんだったら、嫌だな。子どもの体が温かいのに、心臓が動いているのに、死んでいるなんて思えない。それに、体を切られるなんて嫌だし、もしかしたら、奇跡が起きてなんて考えたら、一生後悔すると思う。自分が死んだら臓器提供もあってもいいかもしれないけど、自分の子どもだったら絶対嫌だよ。」

ぼくの体は、自分一人の体ではなくて、家族に大事にされている体なのだとその時思った。自分一人の体だったら、ためらわず臓器提供できるかもしれない。しかし、家族のことを考えると複雑な気持ちになってしまう。

ぼくは、まだ大事な人を亡くしたことも、人の死に立ち会ったことも無い。だから人間の死とはどういうものか分からない。ただ、自分の飼っていたペットの死に立ち会ったことはある。温かい体が、だんだん冷たくなっていって、体がかたくなっていった。これが死なのだと、小さかったぼくでも分かった。小さく冷たくなった体を手で感じて、やっと別れができた。体が温かくて、眠っているようだったら、ずっと側においておきたくなってしまっただろう。

でも、反対の立場だったらどうだろう。大切な人が臓器移植でしか助からないとしたら。以前、臓器移植をするために海外へ行った女の子へ募金したことがあった。その時は、元気になって日本へ戻ってくるといいと思っていた。しかし、それは、一人の命が引き継がれるということだったのだ。助けることのできる命と助かる命がある。他の人の中で生きる。脳があって体があるのか。体があって脳があるのか。生きるとは何だろう。今のぼくには分からない。でも、命の重さは同じということはわかる。

たった一つしかない命、どのように終わるか分からない。ぼくが今出来ることは、いろいろな体験や、たくさんの知識を身につけること。そして、いろいろなことを考え、悔いのないように精一杯生きること。そしたら、いつか答えがみつかるかもしれない。

◆優秀賞（中学生の部）

「権力に負けない世論の力、伝える力」

桜の聖母学院中2年　八城　美和さん

八月二十四日の編集日記に、一九九五年三月に硫黄島で行われた日米合同戦没者慰霊追悼式を取材した際の事が書かれていた。

最後の「情報は世論を動かし体制を覆す力になるだけに、権力側は正しく報じられるのを嫌う。伝える方は命懸けだ」という文章に、私は大きく心を動かされた。これは時代がいくら変わろうとも同じで、今、福島県に住む私達が最も強く感じられることの一つだと思う。

去年の三月、東日本大震災に続き、次々に原発が爆発するという、過去に経験のない大きな災害に巻き込まれた私達。テレビに新聞に、毎日くぎづけになって見ていた毎日が思い出された。テレビから流れる「大丈夫」という、どこかの大学の教授の言葉がとても空虚なものに変わる瞬間、それは何度もあった。そして、それは今でも続いている。

新聞、テレビで爆発の映像を見た瞬間、水道水から放射性物質が検出された時、牛乳や野菜からも次々に基準値を超える放射性物質が検出され、「大丈夫」も「安全」も全て崩れていった。国民のパニックを恐れて控えめな情報を発表する政府と、正しい情報を正確に伝えようとする報道側。何十年が過ぎても、この構図は変わらないと感じた。

硫黄島は戦後、民間人の渡航が制限され惨状は一般に届きにくかったという。激戦で二万人以上の日本兵が戦死したこの島には、今もたくさんの遺骨が、古里に帰れないままに眠っている。政府は今も遺骨収集事業を行っているが、思うようには進まない。これが戦後すぐに始めていたらと思うと、やりきれない気持ちになる。日本軍総指揮官栗林忠道中将夫人の「今日の平和は戦死された皆様のおかげで築かれました」という言葉が、重く響いてくる。今日の日本のために戦死した人達なのに、何十年も経ってからやっと国民の耳に届き、やっと慰霊追悼式が行われたという事実。一般国民には、硫黄島の惨状は知らせたくなかったということが伝わってくる。

終戦から六十年以上が経った現在でも、隠されることがあることを、私達は身をもって知らされた。原発事故直後から、スピーディーの情報から放射線量が高いと言われていた浪江町の山沿いの地域や飯舘村。正しい情報が発表されていれば別の避難の方法があったのではないだろうか。無用の被曝をすることもなかったのではないだろうか。情報の大切さ、重要さを、改めて考えさせられる。

国民の大きな声が「原発全停止」という大きなことを成し遂げた。その後、再稼働されてしまったのは残念だが。日本中の声、世界中の声、そしてそれを伝える方の力で、いつかきっと、「原発全停止」「核廃絶」が成し遂げられる日を、私はこの目で見てみたい。

◆優秀賞（中学生の部）

「触れ合いのチカラを読んで」

郡山二中2年　石井かほる子さん

私は、新聞の健康についてのページは年配者向きと決めつけていて、いつも飛ばしてしまうか斜め読みをするくらいだった。ところが色使いの美しい素敵なイラスト（なかむら葉子作）に目が留まり、それは「触れ合いの力」（山口　創）のコラム用の差し絵だった。

そのコラムは七話目で、セルフマッサージの効用について書かれてあった。肌に触れて癒やすことを「手当て」といい、その方法や効果・皮ふ感覚についてなど興味深い内容は十五話まで続き、掲載される金曜日が私の楽しみになった。

「手当て」というと、私が小さい頃、お腹が痛むと母がお腹をさすってくれたことを思い出す。不思議とすっと痛みが薄れた。そういう経験はだれにでもあると思う。痛みが薄れていくように感じるのは、母に守られているという安心感からなのだろう。

私自身も、「手当て」をしてあげたことがある。曾祖母が亡くなる少し前、病室で横たわる曾祖母の腕や足、背中をゆっくりとマッサージしてあげた。当時、幼かった私は日々弱る曾祖母を、喜ばせたい一心だった。曾祖母は気持ち良さそうに目を細めた。眠ったのかなと思い手を止めると、曾祖母の目がパチリと開き、少し不安な表情になった。今思うとひ孫の小さな手に触れられている間は、心穏やかに気持ちが落ちついていられたのだろうと思う。私は今でも曾祖母の肌の感触を覚えている。

東日本大震災の後、マッサージ師の施しはとても喜ばれ、自分はひとりではないのだという実感を持てるようになったという。単純にマッサージイコール癒やしということではなく、マッサージはメッセージソングや応援歌とは違い、相手を励ましたり直接的に元気づけたりするのではなく、相手の身体を尊重しながら優しく触れて、ひたすら相手の心の痛みに寄りそってあげる「ハグソング」（抱き締める歌）のようなものだと言う。被災地の方へのマッサージも、母が私に、私が曾祖母にしたマッサージも、優しく寄りそうハグソングのようなものだったのだろう。

ここち良いマッサージをしてもらい、そのスキンシップにより皮ふは温められ、同時に心も温められているのだ。最近とても多い私と同じ中学生のいじめや自殺。私はいじめられて傷ついた心も、いじめをする人の尖った冷たい心も、このハグソングのようなマッサージをする事で温めてあげたいと思った。穏やかな心を取り戻せば、いじめたくなる気持ちが無くなり、ひとりじゃないことに気付けば自殺も思い止まらせることができると思う。

だれでもできる簡単なマッサージ。それにはすごい力がある。「触れ合いのチカラ」はすべての人に読んで欲しいと思った。

◆優秀賞（中学生の部）

「祖母への手紙」

郡山二中3年　坂田真理佳さん

認知症の高齢者が三〇〇万人を超えた。二〇〇二年の一四九万人と比べ、この十年で倍増している。この勢いだと、二〇二五年には四七〇万人にまで増加するという。

新聞記事には、認知症の高齢者が予想以上に増えているという事実がただ淡々と記されている。一か月前のわたしだったら、この記事をその文面と同じように淡々と無感情に読んだだろう。そして自分の中で異世界の出来事と位置付けて、その後思い返すこともなかったに違いない。

ところが今、異世界の疾患だったはずの認知症が急に身近な病魔となった。祖母が発症しているかもしれないというのだ。

認めたくはないが、祖母は確かに変わった。少し前までは銀座の映画館街を自分の庭のように歩き回り、あの映画はとても良かっただのあまりうるさい映画は好きじゃないだのと家族をつかまえては話すのが常だった。さらに手紙を書けば必ず本やお菓子の入った小包付きで返事が返ってきた。

しかし今では、物忘れが目立つようになり外出も億劫に感じているようだ。半年ほど前から祖母のそんな様子を気にしていた母が、意を決して祖母を病院に連れて行った。二度に渡り検査をしたが結果は出ず、病院が空き次第検査入院をするそうだ。まだ認知症と決まった訳ではないのだし変わらない人間などいないのだからとわたしは自分に言いきかせ、今まで通り祖母に接しようとしたが、やはり戸惑いを隠せなかった。自分から話しかけることが少なくなり、何度も聞く話に打つ相槌もワンパターンになった。そのためか祖母は「真理佳ちゃんはお手紙の中だといろいろ話してくれて楽しいけど、会うとすっかり変わっちゃうねえ」と悲しそうに母にこぼしたことがあるそうだ。

わたしは自分の振る舞いを言葉では言い尽くせないほど後悔している。祖母が少しでも明るく人生を送れるようにしたい。もし祖母が本当に認知症で、たくさんのことを忘れてしまうとしても、これから喜びに満ちた思い出をたくさん作ってあげたい。昔のことを鮮明に覚えているから、楽しかったことだけ記憶していてくれたらそれでいい。認知症は新しい記憶から順に奪っていくと聞いたことがある。ならば毎日新しい記憶を贈ればいい。束の間祖母の胸の中で輝いて、本人が忘れてしまってからも心を温め続ける記憶を。

わたしは毎日祖母に手紙を書いている。祖母とわたしは趣味が似ているから、書く種は尽きない。内容は、本の話、映画の話、家族の近況報告…とささやかなものだ。通学路には郵便ポストが幾つもあるから、毎日違うところに投函してみようと目論んでいる。

各部門の入賞者

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
渡辺　弥生（二本松北4年）
◆優秀賞
松井菜々美（杉田3年）
会津　春菜（柴宮3年）
豊岡　桃香（桜の聖母学院4年）
◆入選
市村　将也（多田野3年）
白土　愛理（泉北3年）
矢吹　美空（柏城4年）
藤田　英里（小平4年）
芳賀　愛（城北4年）

【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
佐藤　菜月（坂下6年）
◆優秀賞
木村　真心（御山5年）
梅津　大輝（福島一6年）
伊藤　夢絵（泉北6年）
◆入選
本田　新菜（福島一5年）
橋本奈瑠美（原町二5年）
幕田　優菜（桜の聖母学院6年）
武田　晃弥（城西6年）
佐藤　絹子（喜多方二6年）

【中学生の部】
◆最優秀賞
永山　智基（須賀川二3年）
◆優秀賞
八城　美和（桜の聖母学院2年）
石井かほる子（郡山二2年）
坂田真理佳（郡山二3年）
◆入選
鈴木沙樹人（本宮一1年）
松野　愛梨（郡山二1年）
佐藤　和（会津学鳳1年）
石川　智禹（郡山二2年）
佐藤みのり（桜の聖母学院3年）

【学校賞】
福島一小（福島市）
泉北小（いわき市）
郡山二中（郡山市）